

令和8年度 第1回千葉県博物館協議会 議事録

日時：令和8年9月4日（金） 午前10時00分～12時30分

会場：千葉県立中央博物館 会議室

出席者： 委 員 高橋委員（議長）、卯木委員、湯浅委員、臼坂委員、布施委員、門脇委員

【オンライン】関沢委員、鴻野委員

博 物 館 美 術 館：貝塚館長、高山副館長、笠木主任上席研究員

中 央 博 物 館：四柳館長、高山副館長、糸原副館長、伊左治事業部長兼研究部長

現代産業科学館：松田館長、石渡学芸課長

関宿城博物館：豊川館長、小倉学芸課長

房 総 の む ら：西原館長

文化振興課 山口副参事兼室長、玉井副主査

事 務 局 猪野企画調整課長、監物上席研究員、後藤上席研究員、山中研究員

※ 配付資料確認【事務局】

- 1) 議事次第
- 2) 協議会委員名簿、出席者名簿、座席表
- 3) 議事資料

- 1 開会【事務局】：委員10名のうち8名の出席により会議成立（うち2名オンライン）
- 2 あいさつ【中央博物館：四柳館長】
- 3 出席委員紹介
- 3 出席職員紹介
- 4 議事（別紙参照）【議長：高橋委員】
- 5 諸連絡【事務局】
- 6 閉会【事務局】

【議事】

○高橋議長：本日も活発な議論をお願いしたい。本日は3点の報告。議事（１）と（２）は各館の活動の振り返りと評価結果の報告となる。まず、文化振興課から概要を説明いただく。

○文化振興課：議事（１）と（２）の区分について説明させていただく。

（１）「令和7年度外部評価結果の報告」の対象は県立美術館と県立中央博物館。両館は平成29年度まで行っていた外部評価を令和7年度から再開した。評価を行った外部有識者は「千葉県立美術館アドバイザー会議」及び「千葉県立中央博物館リニューアル検討懇談会」の委員である。各委員は今年度に入り、両館の自己点検結果を確認の上、7月にそれぞれ開催された会議・懇談会で外部評価を行なった。今回、その結果概要を両館から報告する。

（２）「令和7年度自己点検結果の報告」の対象は現代産業科学館、関宿城博物館、房総のむらの3館。従来どおり館事業全般について、各館が設定した達成目標に対して、点検評価を実施し、その結果概要を報告する。

（１）令和7年度外部評価結果の報告（美術館、中央博物館）

資料1に沿って、両館の館長から説明を行った。

【県立美術館について】

○高橋議長：総合指標について認知度・利用満足度はどのようにして調べているのか。

→県立美術館：令和10年度に県民を対象にした世論調査を行う予定になっており、その時に結果がわかる。

○高橋議長：資料1-1にある「現状40.1%」という数はどういう統計のとり方をしているのか。

→県立美術館：令和5年度に無作為抽出された県民に対し「県立美術館を知っていますか？」という質問を行った。

→高橋議長：ではかなり統計的な取り方をしているということか。

→県立美術館：信頼できる数値である。

→高橋議長：低い数値とを感じるが、原因は考えられるか。

→県立美術館：やはり我々の努力不足ではないかと感じる。

→高橋議長：いろいろな博物館があるということが県民に届いていないということか。

→県立美術館：そういうことだと思う。「知っている」という言葉の意味も幅があり、名前すら知らない、名前は聞いたことがあるが、何があるか？、どこにあるか？、どういうことをしているかについては知らないなど、回答者により異なると思われる。

→高橋議長：この点について文化振興課からコメントはないか。

→文化振興課：世論調査は令和7年度に中央博物館についても実施し、認知度は同様に低い値が出ている。東葛飾や葛南など、東京寄りの地域はどうしても上野など都内の方面に意識が強く、なかなか逆方向には目が向きにくい。千葉市内などの博物館・美術館周辺では、ある程度高い

値が出るが、全県では低い数値が出るというところがある。

○布施委員：高島野十郎を取り上げた令和7年度の入館者数が152,797人と、他の年より多くなった。なぜ多くなったのかというヒントがあれば教えていただきたい。また、認知度について「知っている」という言葉の意味の幅が広いという話があった。館の名前だけ知っている、博物館の機能等も知っているなど、その辺りは調査の項目には入っているか。

→県立美術館：令和7年度入館者数が増えた理由については、夏の「高島野十郎展」によく人が入ったことがまず挙げられる。令和6年度の浅井忠展などを通して、県立美術館は真面目な展覧会をやるところだという評価が美術ファンの中で定着し始め、高島野十郎展も期待して来た人が多かった。この展示が弾みとなり、年度後半もペースが良く、様々な要因で全体的に入館者数を増やした。ただし、美術館はとにかく人が入れば良いというものでもない。人が入りやすい展示を織り交ぜて、年間の目標値はクリアしつつ、人気は出にくいがしっかりした展示も組み合わせて、年間をマネジメントしている。世論調査について、令和10年度の調査では、令和5年度とは違う精密な世論調査も行えると思うので、より精度の高い県民の美術館評価が得られるのではないかと期待している。認知度を上げるのは本当に難しい。いかに東葛飾・葛南地域の人たちに東へ逆流してもらえるようにするかが我々の大きい課題であり、この地域での認知度向上に向けた取り組みを行っている。

→文化振興課：令和6年度調査について補足させていただく。このアンケートは美術館・博物館に特化したものではなく、県の文化振興全体の計画を作るための質問になっている。まず県立施設を並べて、これを知っているかという聞き方をした。その次の質問で利用したことがあるかと聞いた。以上の2問を聞いている。

→高橋議長：もし評価と絡めるのであれば、もう少し精度の良い取り方の工夫が必要。

○鴻野委員：千葉県立美術館では充実した展覧会を見られるという認識が広まって入館者数が増えているのではないと思う。国外アーティストの招聘や国内芸術家の海外派遣といった取り組みは、美術館が国際交流の拠点となっていて、千葉県や世界に対する大きな貢献であり、こうした取り組みを丁寧に行うことが未来の文化をつくることにつながる。また、美術に関心のある層にとって、注目される館のひとつとなっているが、美術に深い関心を持たない層、子供や地域の方にとっても開かれた場になっていることは高く評価されるべき。「高島野十郎」は全国を巡回しているが、各館で入館料がかなり異なる。千葉県立美術館が一番安い料金設定で、一般1,000円、高大生500円、これに対し最も高い大阪中之島美術館は一般1,800円、高大生1,200円。安いことは子どもや家族連れにとって大事だが、経費高騰の中、苦勞もあるのではないか。美術館に限らず、他館も含めて入館料について工夫していることはあるか。なお、美術館・博物館の認知度に関して、「県民の日」中央行事に参加し、どの博物館のコーナーも盛況だった。こうした催しは子ども達が関心を持つきっかけとして重要。ただし、認知度向上や入館者数増加のためには、各館の取り組みだけでなく、県民や近隣都県の人々が子育てや仕事・健康・貧困・介護などの不安から解放されて余暇や文化に眼を向ける余裕を持つことが前提。私たち皆の課題である。

→文化振興課：入館料については、使用料及び手数料条例で定められている上限額を超えて設定することができない。しかし、社会情勢を勘案して見直すことは今後必要と考えている。

【県立中央博物館について】

○布施委員：フィールドミュージアムの取り組みで、残念ながら目標に達することができなかったという報告があった。フィールドミュージアムは君津市も関係があり、もし地元として、何か考えなければいけない点があれば教えてほしい。

→中央博物館：フィールドミュージアムに関して、目標8件に対し実施6件で75%となっているが、荒天で中止になったものもあるためこのような数値になっている。一方、君津市立清和小学校で行なっている教室博物館の来館状況が芳しくなく、より魅力的な活動内容にできるよう君津市とも相談できればと考えている。一方、香取市佐原で「町のフィールドミュージアム」の実施を模索している。同市内の大利根分館は休館しており、こうした活動により、連携を深めようと模索している。

【県立美術館・県立中央博物館に共通する事項について】

○湯浅委員：両館とも厳しい評価の中でA評価が多く、B・C評価があった項目についても、改善点を挙げており感銘を受けた。質問として、①それぞれの入館者数に占める年齢構成では、どこが伸びてどこが伸びていないなどが分かれば教えていただきたい。②県立中央博物館は基盤事業に学芸員の学術著作や外部資金の活用を挙げ、これらは博物館の基礎体力として重要である。一方、県立美術館の方ではこの点が触れられていないが、何か取り組みはないか。

→県立美術館：①については、高年齢層が多くなっている。夏休みに特化したプログラムなど、低年齢やファミリー層に来てもらえるような取り組みを準備している。昨年度の来館者は明らかに県外からが増えたが、県西部の方々に東へ逆流してもらえるようにした取り組みが、近隣都県の人にも来てもらう結果を招いた。②について、県立美術館は中央博物館と比較すると研究機関としての要素はやや薄いですが、展覧会図録では必ず学芸員の研究成果を載せるようにしており、こうした機会を増やしている。外部評価では強調していないが、館としては十分取り組んでいる。

→中央博物館：①について、常設展示はシニア層が多い。企画展はテーマによって異なり、コラボ作品のファンが多く訪れた企画展「生薬」の場合は有料入館者数が多く、高大生などの若めの層も通常より多かった。現在開催中の特別展「ちば恐竜博」は、子ども連れの家族が多いという印象。②については科研費の採択率が全体的に落ちているが、申請のノウハウの職員内での伝達に取り組んでいる。

→高橋議長：科研費について、大学ではURA（ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレータ）という専門職員のアドバイスを受けられる。博物館でもそういった工夫をしていく必要がある。

（2）令和7年度自己点検結果の報告（現代産業科学館、関宿城博物館、房総のむら）

資料2に沿って、各館の館長から説明を行った。

【博物館全体について】

○高橋議長：各館ともWebアクセス件数が指標にあげられているが、どういうページがよく見られているか、Webサイトとしてどういうニーズがあるかというアクセス解析は行なっているか。Webサイトはユーザーから見れば、能動的に動かないと見られない情報である。最近では、SNSから受動的に情報を得て、そこから興味があるものを深めるという流れが強まっているため、そこへの対応が必要なのではないかと感じている。一方、県立美術館のコレクション100選のアーカイブページなどは非常に良いWebの使い方である。こうした情報提示の2つの流れを考慮し、有効なWebの使い方を検討する必要がある。これについて門脇委員からコメントがあればお願いしたい。

→門脇委員：アクセス解析はできるのであればした方がよい。どうやってホームページに来たかを見ると、どこの検索から入って来たかがわかり、そこに一番来館者となり得る人がいるということになる。そこを入口として情報発信を仕掛けるのがよい。また、SNSからの誘導というのものもあるが、最近はAIからの誘導もある。AIが情報源とするGoogleの地点情報を日本語と海外の言語でしっかり整備する必要がある。実際の事例として、海外の方はどこに行けば良いかをAIに聞き、AIは現在地近くのサイトを薦めるという状況にある。いかにWeb上に明確な情報が多く載っているか、そこに人の動きがあるかということをもとにAIは情報を引っ張って来る。今は各館がしっかり情報を更新しているので、アクティブにページが動いていることは認識されていると思う。後はそこがどういう施設なのかを明確に理解できるような情報を入れていくことが大事である。

→高橋委員：これについてはかなり技術的なことが必要になると思う。個々の博物館が行うのは難しいのではないか。

→門脇委員：HPの制作・運用は外部に委託していると思うが、制作会社の方で解析は行える。解析を含めて委託をするのがよい。レポートを出してもらえる。

○高橋議長：入館者数は定量化には分かりやすい数字だが、コンテンツの方が大事だと思っている。コンテンツに対する評価は聞き取り調査などもあると思うので、ぜひ内容の充実につながるような評価の仕方も検討してほしい。

【県立現代産業科学館について】

○布施委員：学校団体見学はあるが、企業が団体として見学に来るという実績はあるのか。

→現代産業科学館：企業が団体見学で来ることは、ほとんどない。

○布施委員：子どもが減少する中で、あえて大人をターゲットとした取り組みというものはあるか。

→現代産業科学館：今年新しい取り組みとして、開館延長日のプラネタリウムでは、高校生以上を対象とする大人向けのプログラムを行い、鑑賞された方々に好評だった。

【関宿城博物館について】

○湯浅委員：来館者数が全体的としては漸減傾向にある中でトピックス展は増加しているとの説明だった。増えた理由は何か。

→関宿城博物館：令和7年度前半のパネル展「もっと利根川図志」は、令和6年度企画展「利根川図志」の来館者からもっと見たいという要望を受け、企画展で取り上げられなかった視点として紀行文を深掘りした。紀行文的な展示は受け入れられやすい傾向にある。今後も年間2回のパネル展の内1回は前年の企画展に関連させる形で行うことを検討している。また、令和7年度後半のパネル展「30年のあゆみ」では、体験的要素として30年のあゆみをすごろくにし、夏休み中の子どもにヒットした。

○布施委員：子供が減少する中で、あえて大人をターゲットとした取り組みというものはあるか。

→関宿城博物館：当館はもともと子ども受けする展示ではないという前提がある。秋の企画展「戦国の関宿」では大河ドラマと同時代の関東を取り上げる展示で、これは大人向けである。ただし、来館者はほとんど車で来るので、子どもが親と一緒に来ることは多い。夏休みは子どもも入りやすい内容を展示し、秋の展示は大人が興味深く見られる内容として、今後もやっていきたい。

【房総のむらについて】

○布施委員：屋外型博物館ということで真夏の酷暑は努力ではどうにもならない。今後、夏以外で重点的に取り組もうとしていることや、これまで夏にやっていたことを別のシーズンにずらして行うなどの予定はあるか。

→房総のむら：当館は雨や酷暑の影響が大きい。ミストを設置したり、冷房のある団体向け施設をクールスポットとして個人来館者にも開放するなどの暑さ対策を行なっている。また、夏のまつり「むらの縁日・夕涼み」は19時まで開館延長することで暑い時間を避けても参加できるようにしている。まつりは年6回開催しており、季節を問わず楽しんでもらえるように取り組んでいる。

(3) 特別展「ちば恐竜博-驚異の捕食者たち-」の視察及び講評

県立中央博物館で開催中の特別展「ちば恐竜博-驚異の捕食者たち-」について、企画展示室で担当者による解説を行った。その後、会議室に戻り、講評や意見交換を行った。

○高橋議長：今の展示についてコメント等あればお願いしたい。この展示だけではなく、他の展示でも共通するようなことを含めてコメントいただければありがたい。

○臼坂委員：まだ会期中ではあるが、今回の恐竜博の県内・県外に来館者の割合は、どのような状況か。

→中央博物館：先ほど学芸振興室長からあった認知度の世論調査結果も受け、「どこから来ましたか？」という簡単なアンケートを、出口で地図にシールを貼ってもらう形で実施した。全来館

者が参加したわけではないが、概ね県内 85%、県外 15%という結果だった。

→臼坂委員：この会期初めに、NHKの夕方の番組「首都圏ニュース」で紹介した。この番組で紹介するとだいたい県外客の増加が見られる傾向にあるが、今回はどうだったのかが気になった。

→中央博物館：肌感覚では県外からの来館者も多い。

→臼坂委員：どこから来ているかという情報を統計的に取るということを継続的に行えば、いろいろな分析もしやすいかと思う。

○臼坂委員：全般的なことになるが、それぞれの館が限られた予算と人員の中でできる限りのことをやっていることが伝わってきた。特に県立美術館の貝塚館長は、私どものところから近いこともあり、自ら小学生に解説をされたり、お客さんと接している姿を見かけている。また、地域との連携やコラボレーションに力を入れているのを感じている。美術館であれば美術ファンが自分で探して来ると思うが、それ以外の一般的な博物館では、よほどの特徴、日本で有数、というものがないと、じっとしてはそんなに人が来ないということで、認知率をあげようと力を入れられていると思う。そういう意味では、いろいろなことをされている割には、報道側の人間からするとまだちょっとアピールが少なくありませんか、という気がしている。報道機関への投げ込みは、実際に報道されることも少ないので続けると疲れることもあるかとは思いますが、一般的な周知と併せて、諦めずに投げ込み続けていただきたい。また、日程・特徴・押しポイントが早めに分かるとこちらも準備がしやすい。

○高橋議長：学芸員の方の説明は非常に聞いていて面白い。一時のものとして消えていくのはもったいないので、形のあるものとして残せないのかとも思っている。職員の負担増加になりかねないが、記録としての側面もあると思う。先ほどの、特別展の解説の中で、次世代の研究者を育てるという視点の解説もあったので、余計にそう思った。

以上、議事終了。